

うたとかたりの対人援助学

第24回 『安珍清姫の唄』巡礼記

鵜野 祐介

1. 「安珍清姫の唄」とは

今年になり、コロナ禍が少し落ち着いた頃合いを見計らって、「安珍清姫の唄」に関連する場所を何か所か訪れました。今回はこの唄との出会いから現在までの道のりを「巡礼記」として綴ってみたいと思います。

「安珍清姫の唄」は、和歌山県の道成寺を舞台とする悲恋物語を元にしており、参拝の途中、一夜の宿を求めた僧・安珍に清姫が懸想し、恋の炎を燃やし、裏切られたと知るや大蛇となって安珍を追い、最後には道成寺の鐘の中に逃げた安珍を焼き殺すという話です。この話は「道成寺物」として能楽、人形浄瑠璃、歌舞伎でもよく知られている他、手まり唄やお手玉唄、子守唄などのわらべうたとしても全国各地で歌い継がれてきました。少女たちは何故この唄に魅かれてきたのかを探るのが、この巡礼の目的です。

2. 出会い —1988年夏、鳥取県佐治村—

私がこの唄と出会ったのは1988年のことでした。鳥取県八頭郡佐治村（現在の鳥取市佐治）で行われた稲田浩二先生を団長とする専門家数名と京都女子大学の学生20数名による口承文芸民俗調査に参加した当時大学院生の私は、1922年生まれの下田いわさんから次のような唄を聞きました。

もおうしもおうと呼ぶ声に
出てみりゃ女がただひとり
もおうしお舟の船頭さん
この川渡してちょうだいな …

24連まで続く長い唄を、いわさんはメモも見ない

で最後まで歌い切ったのです。その後でおっしゃった「娘の頃に歌って以来、久しぶりです」との言葉が忘れられません。紙漉きをしながら年上の女性から教わった唄とのことでした。約50年間、彼女の身体の中で眠っていたこの唄は、何故こんなにもしっかりと彼女の脳裏に刻み込まれていたのでしょうか。

2. 再会 —2020年8月、「安珍清姫ご和讃」—

その後この唄について深く考える機会はなかったのですが、2020年8月、みやぎ民話の会顧問の小野和子さんから4枚組DVD『福島県奥会津 五十嵐七重の語りを聞く』が届き、その中で、姑のキヨイさんが10歳ぐらいの頃に群馬県片品村（福島との県境）で友達と歌っていたという「安珍清姫ご和讃」を七重さんが歌われるのを観て、佐治村で聴いた唄の記憶が甦ったのです。32年ぶりの再会でした。

国は奥州 白河在の たずねござなき 根田村の
父は代々 山伏なるが 実は名高き 桃かず殿
…

中に安珍 こもりしを 七重に巻き絞め 炎を吹き
中で哀れな 安珍様よ 中に哀れな 安珍よ

物語の題材は明らかに「安珍清姫（道成寺）」ですが、歌詞もメロディも佐治村のものとは全く異なります。まず、安珍の生まれが奥州白河と歌われていることに驚きました。それからまた、キヨイさんの場合も、七重さんがその歌声を耳にするまでの70年余り、この唄が彼女の体内で眠っていたという事実にも驚かされました。

興味深いことに、このDVDの中で七重さんは蛇が登場する昔話を4話も語っておられます。「蛇の目玉の昔」(蛇女房)、「口持だねおなごの話」(食わず女房)、「大蛇になった娘おりや」(蛇女)、「蛇とびっきと蜂の伊勢参り」です。このような七重さんの蛇の昔話に対する馴染み深さが、姑のキヨイさんの歌声を聞きとめる耳を育てたと言えるのかもしれませんが。

3. 巡礼その1 —2022年3月、道成寺—

2022年3月上旬、和歌山県日高郡日高川町の道成寺を訪ねました。JR道成寺駅を下りて少し歩くと参道があり、両側に土産物店や休憩所・飲食店が立ち並ぶ道を進んで行くと、62段の石段が見えてきます。



道成寺の公式HPによると、この石段は能楽の「道成寺」、歌舞伎の「京鹿子娘道成寺」、日本舞踊の「紀州道成寺」等にある「乱拍子」というシーンのもとになったことでも知られており、乱拍子とは、足で拍子を取りながら舞うことだそうです。清姫あるいは清姫の亡霊が、安珍を捜し求めながらこの石段を登るという意味がこめられていると言われ、つま先だけを左右に動かす所作もあり、安珍を探しているのだそうです。

石段を登り切り、仁王門をくぐり抜けると、本堂、宝仏殿、三重塔などが点在する境内が広がります。宝仏殿には、いずれも国宝の千手観音菩薩像、日光菩薩像、月光菩薩像三体の他、重要文化財11点、県指定文化財4点が収められています(同HPより)。

当然のことながら、ここに鐘はなく、「鐘巻之跡」と刻まれた石碑が立っていました。寺伝によれば、初代の鐘が928年の安珍と清姫の事件で焼失した後、1359年に二代目が作られましたが、1585年の豊臣秀吉による紀州攻めの時に持ち去られ、その2年後

に後ほど紹介する妙満寺に奉納されたそうです。

宝仏殿の仏像を拝謁した後、ご住職による絵解き説法を聞きました。聞き手は私の他には中高年のご夫妻一組だけでしたが、ツボを心得たユーモラスな語り口は一聴の価値あるものでした。

帰りに、石段を下りたところにある土産物店で「雲水つりがねまんじゅう」を買いました。釣鐘状の薄皮の中に安珍に見立てた餡(黒餡または白餡)が入っており、「餡」と「安(珍)」が掛詞になっていると考えると、黒仏になった安珍を釣鐘ごと食べるという嗜好で、なかなかグロテスクな逸品です。



4. 巡礼その2 —2022年6月、根来寺—

今年(2022年)6月上旬、和歌山県岩出市にある根来寺を訪れました。大阪・天王寺駅からJR紀州路快速に乗って50分、和泉砂川駅で下車し、岩出駅行の路線バスに乗って15分、岩出図書館停留所で下車してさらに徒歩で10分ほど行くと、右手に巨大な大門が見えてきます。そこから5分ほどなだらかな坂道を上って行くと、「新義真言宗総本山 根来寺」の石柱にたどり着きます。



根来寺は、1132年高野山に開かれた大伝法院を始まりとする新義真言宗の総本山で、開祖は覚鑿上人です。15~16世紀には全国から学問を志す僧侶

が集まる大寺院として繁栄しましたが、やがて天下統一を目指す豊臣秀吉と対立することになり、先ほどの道成寺と同じく、1585年に秀吉軍が攻め入り、大塔・大師堂など二、三の堂塔を残して全山焼失しました。しかし江戸時代には徳川家の外護のもと、大門・伝法堂・不動堂など主要な伽藍が復興されました。

この日は、紫陽花と睡蓮が見頃を迎え、ウグイスをはじめ鳥たちの鳴き声がこだましていました。鐘楼門をくぐり抜け、光明殿や庭園などを拝観した後、本坊寺務所を出て、大塔へと向かう途中の、渓谷に架かった滝見橋を渡り終えると、上り道右手に「根来の子守唄」の歌碑があります。

歌碑に刻まれた文言は短いので、ここには岩出町が「第12回全国子守唄サミット&フェスタ99 in 岩出」(1999年)の開催にあたって制作したCDの歌詞を掲載しておきます。

ねんね根来の よう鳴る鐘はヨ
一里聞こえて 二里ひびくヨ バイバイ
ねんね根来の かくばん山でヨ
としよじ来いよの 鳩が鳴くヨ バイバイ
ねんね根来へ いきたいけれどヨ
川がおとろし 紀ノ川がヨ バイバイ
(中略)
さんさ坂本 室家の娘ヨ
嫁入りしたとて 住蛇池ヨ バイバイ

今回の訪問の目的の一つは、この子守唄にも歌われた住蛇池を確認することでした。この池をめぐる、次のような伝説が残っているのです。

「根来山の麓、西坂本に室家忠家という豪家がありました。子どものいない家だったので小野小町のお墓に参り願をかけたところ、その甲斐あって小町そっくりの美しい桂姫をさずかることができました。桂姫が年頃になった頃、毎夜彼女の枕元へ美男が現れては朝になるとどこへ行くともなく消えていくのでした。

やがて、桂姫が和泉国尾崎の大原高広という北面の武士に嫁ぐ日がやってきました。豪勢な嫁入り行列が住持池にさしかかった時、池から突然大蛇が現れ、姫をさらって再び水中に没しました。娘を失った母は悲

しみ、三日三晩火を焚いて祈祷しました。四日目の朝、池のそばに立ち、せめてもう一度でよいから娘の顔を見せてほしいと涙ながらに祈ったところ、水面に大蛇と桂姫の半身があらわれました。母は娘に抱きつこうとしましたが、その瞬間、そこには仲よく二匹の大蛇の泳ぐ姿がありました。

桂姫は小野小町の、大蛇は小町に思いを寄せて叶わなかった深草少将の生まれ変わりだと言われています(『岩出町誌』および岩出市公式HPより)。

「住持池」、別名「住蛇池」は、岩出^{じゅうし}図書館から500メートルほど西にある周囲約4キロの大きな池で、その東側には坂本神社が建っており、池の周囲の鬱蒼とした木立からは、今も何モノかの気配が感じられました。

道成寺の「安珍清姫」では清姫のみが蛇に変身するのに対して、この桂姫の話では男女ともに蛇身となっていて、小野小町にまつわる伝説となっているのが特徴です。それにしても、和歌山には蛇や竜にちなんだ地名や伝説のなんと多いことか。

それはこの地が豪雨・土砂崩れや旱魃といった、水がもたらす災害の頻発する地であることや、銅や鉄鉱石をはじめとする鉱石の豊富な地であることと関係があるとされています。蛇や竜は「水の神」「金属の神」として知られているからです。

5. 巡礼その3 —2022年9月、安珍堂—

9月上旬、福島県白河市の安珍堂を訪れました。ここは安珍の生誕地とされるのです。東北新幹線の新白河駅からローカル線で一駅のJR白河駅で下車し、タクシーで約10分行くと、山あい^あに青々とした水田が広がる根田地区に着きます。道路沿いの右手の山すそに「娘道成寺 安珍之里」と白抜きで記された木製の看板が目に入り、入口の道を挟んだ向かいには、白河ライオンズクラブが1982年に建てたという「安珍生誕之地」の大きな石碑もありました。

残暑厳しい昼下がり、クマゼミの鳴き声を聞きながら、急な斜面の石段を10数メートル登って行くと、安珍堂がありました。あいにく引き戸がすべて閉まっていたので覗くことはできませんでしたが、この中に安珍像が収められているそうです。



案内板「安珍像」によれば、この安珍像は元々、和歌山の道成寺に所蔵されていましたが、1985年、道成寺および地元有志の好意により、東北新幹線上野駅乗入れを記念し、安珍の生誕の地とされるこの場所に里帰りしたものだそうです。また、この地に伝わる安珍念仏踊りは、彼の冥福を祈るため根田の里人がはじめたものといわれ、歌舞伎などで知られる「娘道成寺」の物語を歌い込んだ念仏踊りとして知られ、毎年3月27日の安珍忌に供養として踊られています。

それでは、安珍の出身地が福島・白河と伝えられてきたのは何故でしょうか。今年の夏、仙台育英高校の優勝により、高校野球の優勝旗が史上初めて白河の関を越えたことが大きな話題となりましたが、青年僧安珍は今から一千年以上前に白河の関を越えて紀州熊野へ参詣したと伝えられているのです。

東北・福島と近畿・和歌山をつなぐ存在として有力視されている歴史的なキーパーソンは修験道の山伏です。熊野は修験道のメッカとして知られていますが、東北地方もまた出羽三山をはじめ修験道の盛んな地です。源義経の忠臣・武蔵坊弁慶は、一説によると和歌山県田辺市が生誕の地とされています。京都・鞍馬寺で修験僧の教えを受けた義経と五条大橋で出会った弁慶は山伏のいでたちをしており、終生その身を義経に捧げましたが、彼の終焉の地は奥州・衣川でした。

山伏には宗教者・修行者としての貌の他に、金銀や鉄鉱石などの鉱脈をよむ「山師」の貌もあったようです。紀州と奥州は共に古来、鉱物資源が豊富であり、山師たちや鉱石採掘に従事する人々のネットワークもできていたことがわかっています。こうした宗教的・経済的なつながりを背景として生まれた、福島と和歌山の若い男女の悲恋物語が、幾多の娘たちによって憧れとともに歌い継がれていったのです。

6. 巡礼その4 —2022年11月、妙満寺—

11月下旬のよく晴れた午後、京都市左京区岩倉にある妙満寺を訪れました。紅葉が盛りを迎えており、観光客や七五三祝いの親子連れの姿も見られました。ここに、道成寺二代目釣鐘が奉納されているのです。

「正平14年(1359)3月31日、道成寺では安珍・清姫の伝説以来、永く失われていた鐘を再鑄し鐘供養を盛大に営みました。すると、その席に一人の白拍子が現われ、舞い終わると鐘は落下し、白拍子は蛇身に変わり日高川へと姿を消してしまいます。その後、近隣に災厄が続いたため、清姫のたたりと恐れられた鐘は山林に捨て去られました。

それから200年あまり経った天正年間、その話を聞いた「秀吉根来攻め(1585)」の大將・仙石権兵衛が鐘を掘り起こし京都に持ち帰り、妙満寺へと納められました。そして、時の貫首・日殷大僧正の法華経による供養によって怨念を解かれ、鳴音美しい霊鐘となったと伝えられます」(妙満寺公式HPより)。

本堂の正面右手奥に釣鐘は置かれていました。思ったよりも小振りで、膝を抱えてようやく入れるぐらいのサイズです。初代も同じぐらいのサイズだったとすると、「こんな小さい釣鐘ならよもや人間は入れまい」と清姫に思い込ませるための策略だったのかもしれない、などと思いを巡らせました。



先ほども述べたように、「安珍清姫の唄」をはじめ蛇や竜に変身する女性にまつわる唄や物語は全国各地に残っています。今回紹介したような歴史的(宗教的・経済的)な背景を踏まえつつ、この物語や唄を伝承してきた人びと、特に女性たちの想いについて考えていきたいと思っています。これからもこの物語唄を巡る旅は続きそうです。